

青少年のインターネット・リテラシー指標 —指標開発と実態調査—

平成24年9月
総務省総合通信基盤局
総務省情報通信政策研究所

1. 青少年がインターネットを安全に安心して活用するためのリテラシー指標 - ILAS (Internet Literacy Assessment indicator for Students) -

- スマートフォンが急速に普及し、インターネットがますます青少年にとって身近になる中、青少年がインターネットを安全に安心して活用するためには、インターネット・リテラシーの向上が急務。
- 総務省では、利用者視点を踏まえたICTサービスに係る諸問題に関する研究会（青少年インターネットWG）の提言（平成23年10月）を受け、リテラシー向上のための前提として、特にインターネット上の危険・脅威に対応するための能力とその現状を可視化するため、これらの能力を数値化するテストを開発。
- 協力を得られた学校等において、本年6月から7月にかけて実際にテストを行い、その結果を集計・分析・比較したものを「青少年がインターネットを安全に安心して活用するためのリテラシー指標（ILAS: アイラス）」としてこのほど整理したところ。
- ILASは、地域での周知啓発活動や、事業者による安心安全サービスの提供・改善に役立てるとともに、OECD等における国際的な指標づくりに対して我が国からインプットしていく。

■「青少年が安全に安心してインターネットを利用できる環境の整備等に関する法律」(平成21年4月1日施行)

【基本理念】

- ① 青少年の適切なインターネット活用能力の習得（インターネット利用に係るリテラシー向上）
- ② 青少年の有害情報の閲覧機会の最小化（フィルタリングの機能向上・普及、関係事業者による取組み）
- ③ 民間による自主的・主体的取組、国等による尊重・支援

■利用者視点を踏まえたICTサービスに係る諸問題に関する研究会(青少年インターネットWG)提言(平成23年10月)

2. 各関係者に求められる役割等 （中略）

行政には、（特にインターネット上の危険への対処に係る）インターネットリテラシーに関する指標を、国際的に比較可能な形で整備し、定期的に公表していくことが求められている。

■青少年のインターネット・リテラシー指標に関する有識者検討会(座長: 赤堀侃司白鷗大学教授)(平成23年9月～24年3月)

教育工学や法学等に知見を有する有識者の方々からのご知見を踏まえ、特にインターネット上のリスク分類と、これに対応した危険・脅威への対応能力の整理、この能力を明らかにするテストの開発・分析・整理を実施。

(顧問) 堀部政男（一橋大学名誉教授）、渡部洋（東京大学名誉教授）

(座長) 赤堀侃司（白鷗大学教育学部長・教授）（座長代理）新井健一（ハネッセ教育研究開発センター長）

小泉力一（尚美学園大学教授）、中川正樹（東京農工大学教授）、松浦敏雄（大阪市立大学教授）、藤川大祐（千葉大学教授）、新保史生（慶応義塾大学准教授）、

齋藤長行（青山学院大学客員研究員）、石戸奈々子（NPO法人 CANVAS 副理事長）

2. ILASによる我が国青少年のインターネット・リテラシーの現状分析(全般)

○ 本年6月から7月にかけて、全国23の公立・私立の高等学校等において、約2500名の1年生相当を対象にテストを実施。併せて、利用している機器やトラブル経験の有無等についてアンケートを行い、クロス集計を実施。

インターネット・リテラシー指標 (ILAS)

インターネット上の危険・脅威への対応に必要な能力
(有識者検討会において以下の項目に整理)

1. インターネット上の違法コンテンツ、有害コンテンツに適切に対処できる能力

- a. 違法コンテンツの問題を理解し、適切に対処できる。
- b. 有害コンテンツの問題を理解し、適切に対処できる。

2. インターネット上で適切にコミュニケーションができる能力

- a. 情報を読み取り、適切にコミュニケーションができる。
- b. 電子商取引の問題を理解し、適切に対処できる。
- c. 利用料金や時間の浪費に配慮して利用できる。

3. プライバシー保護や適切なセキュリティ対策ができる能力

- a. プライバシー保護を図り利用できる。
- b. 適切なセキュリティ対策を講じて利用できる。

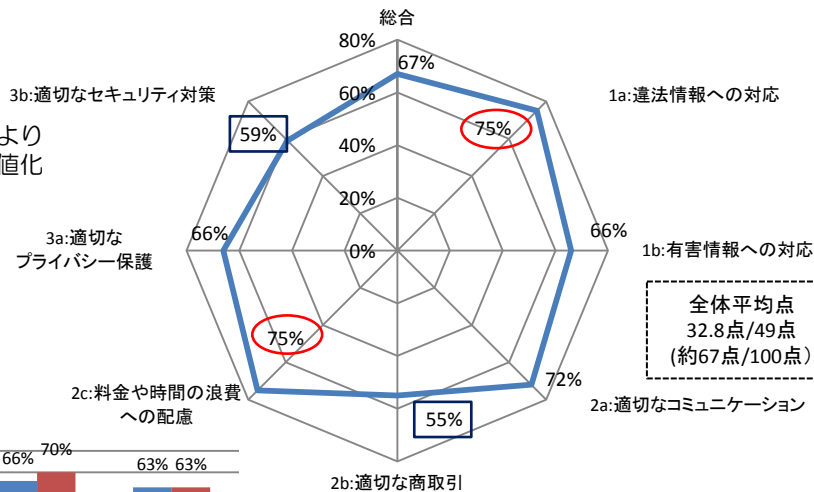
テスト結果の全般的評価

○ 違法情報への対応(著作権、肖像権等)(1a.)と料金や時間の浪費への配慮(2c.)に関する能力が相対的に高い。
○ 適切な商取引(詐欺、不適正製品等)(2b.)と適切なセキュリティ対策(不正アクセス等のなりすまし)(3b.)に関する能力が相対的に低い。

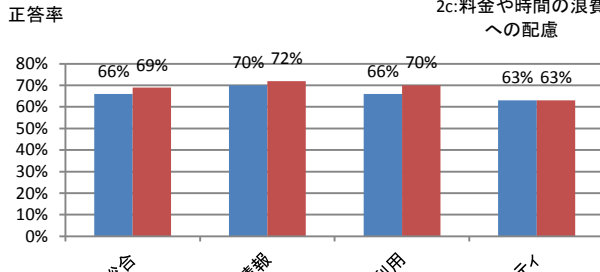
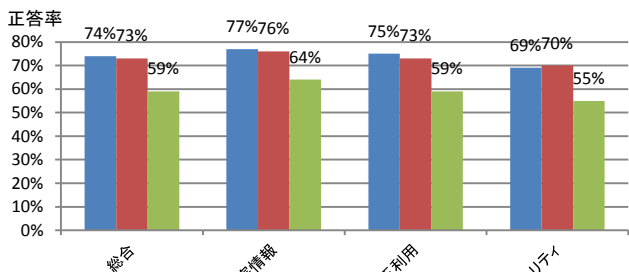
→ これらの分野について重点的な啓発が必要



テストにより
能力を数値化



全体平均点
32.8点/49点
(約67点/100点)



■ 特別区 人口50万人以上 (462人)
■ 中核市 人口30万人以上 (774人)
■ 特例市とその他 人口30万人未満 (1228人)

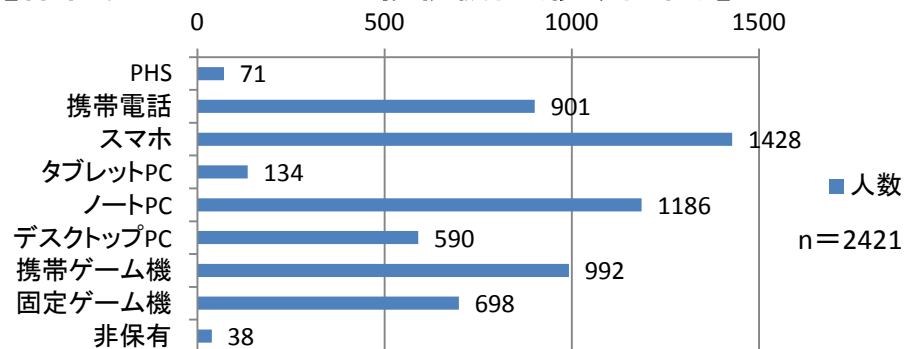
■ 男子 1423人
■ 女子 988人

○ 都市部のリテラシーが相対的に高いことが判明
→ 地域における普及啓発が重要

○ 男女間に大きな差がないことが判明

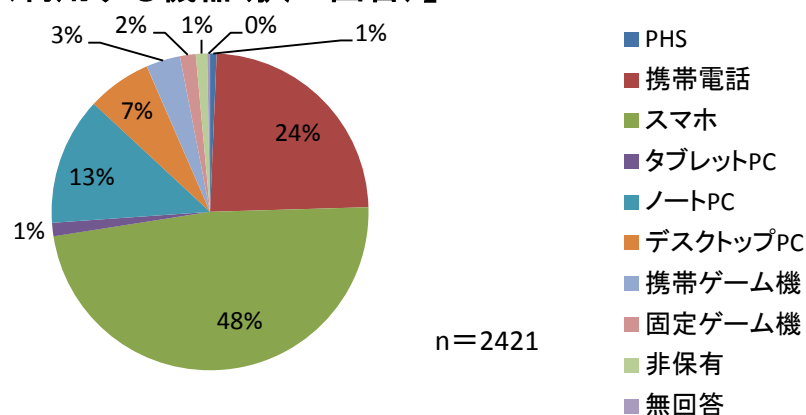
3. ILASアンケートにより判明した青少年の利用機器の現状

【保有するインターネット接続機器(複数回答)】



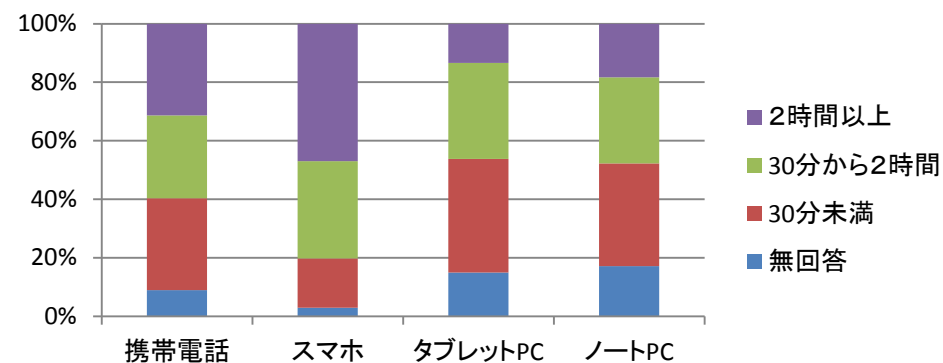
スマートフォンを保有する青少年が全体の過半数を超えている(59%、1428人/2421人)。

【最もよく利用する機器(択一回答)】



インターネットに接続する際、スマートフォンを最もよく利用する青少年が約半数(48%、1162人/2421人)。

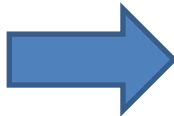
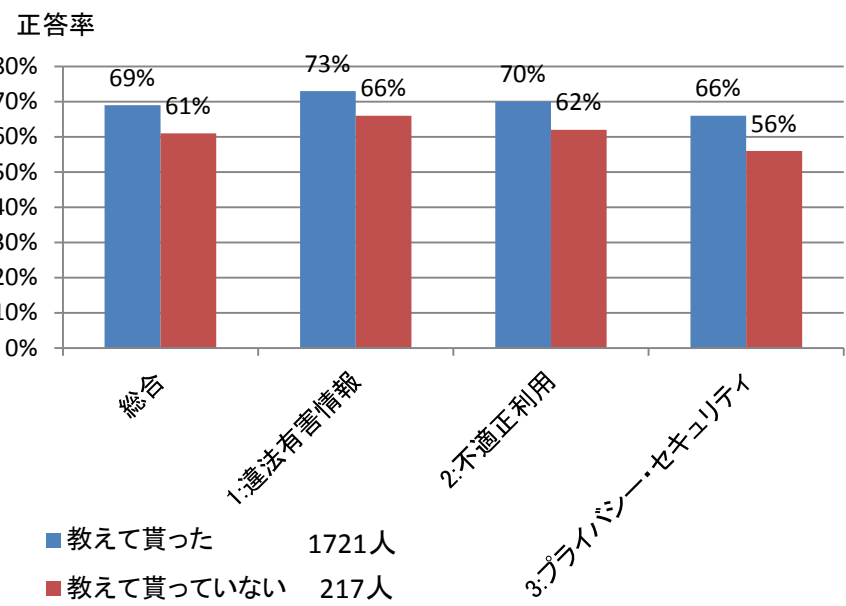
【端末別使用時間】



スマートフォンは他の端末と比較して使用時間が長い傾向(2時間以上が47%、671人/1428人)。

1. インターネット上の危険について学習経験がある青少年のリテラシーが高い。

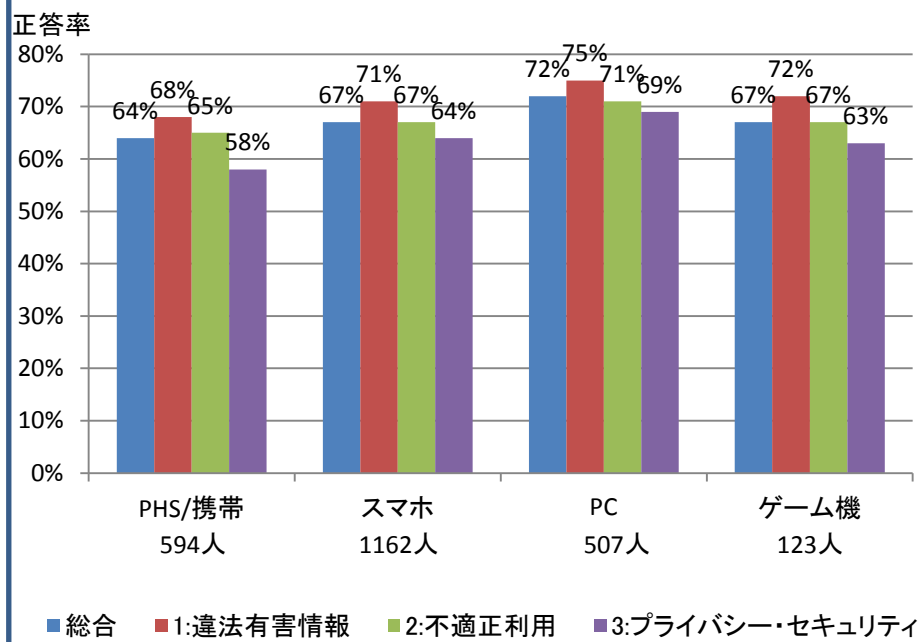
・インターネット上の危険に関して何らかの学習の経験があるかどうかをアンケートで聞いたところ、学習経験がある青少年のリテラシーが高い。



今後もインターネット上の危険に関する学習の機会を提供することが重要。

2. PCをよく利用する青少年のリテラシーが高い。

・よく利用する機器別で比較したところ、PCをよく利用する青少年のリテラシーが高い。

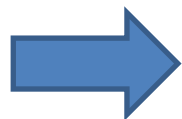
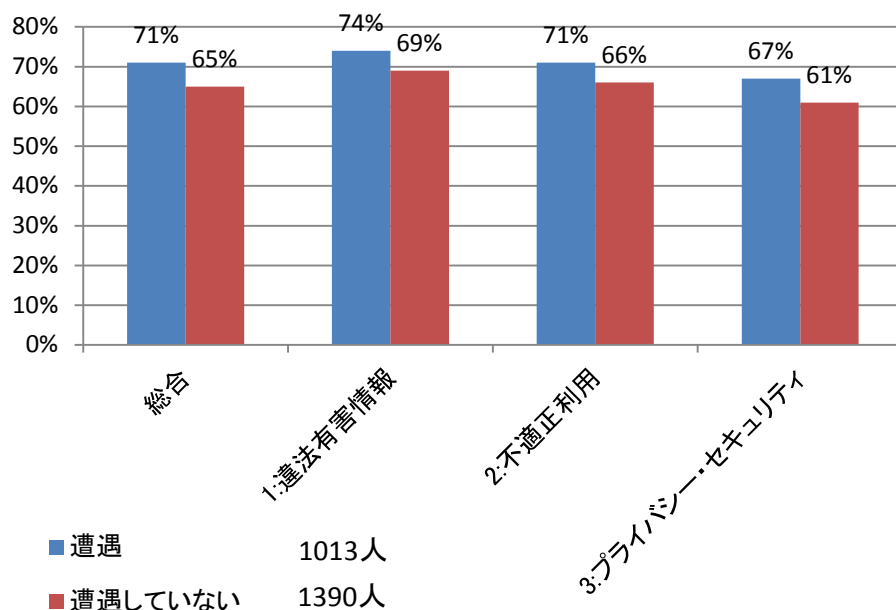


PC利用者のようにプライバシー・セキュリティ等の意識を高めていくことが重要。

3. トラブルに遭遇した経験のある青少年のリテラシーが高い。

・トラブルに遭遇したことがあると回答した青少年の方が、遭遇していないと回答した青少年よりリテラシーが高い。

正答率

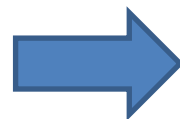
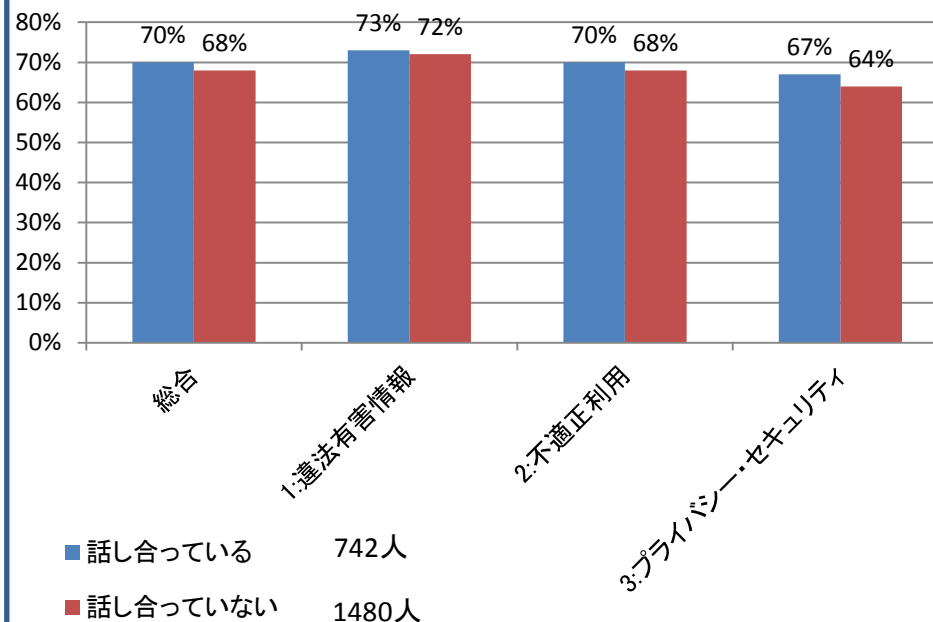


インターネットを利用させながらリテラシーを高めることが重要。

4. 家庭で話し合いをしている青少年のリテラシーが(やや)高い。

・家庭でインターネット上のリスクについて話し合いをしている青少年のリテラシーが、話し合いをしていない青少年よりいずれの分野においても若干リテラシーが高い。

正答率



家庭での話し合いを勧めると共に、保護者への啓発を進めることが重要。

フェーズⅠ

【リスク分類、テスト準備】

- ①過去の整理や事例を参考にインターネット上のリスクを整理分類
- ②各リスクに対応するリテラシーを定義
- ③リスク対応に必要な能力の整理
- ④必要なリスク及びこれに対応するリテラシー(知識・行動)をさらに細分化

(参考2 参照)

フェーズⅡ

【テスト・アンケート実施
結果集計・分析】

- ①フェーズⅠにて細分化されたリテラシーを測る問題の開発
- ②開発された問題の妥当性等を確認するプレテストの実施
- ③テスト問題、アンケートの実施
- ④テスト結果、アンケート結果の集計・分析

(参考3 参照)

フェーズⅢ

【活用】

- ①項目や属性等による相対的なリテラシーの差異を分析することで官民の取り組みの今後の見直しに役立てる
- ②OECD等における国際的なリテラシー指標整備の取り組みにインプット

(参考4 参照)

【参考2】リスク分類と必要なリテラシー項目、テスト問題の例(フェーズⅠ)

【青少年に対するインターネット上のリスク分類】

[OECDのリスク分類を参照して作成]

大分類	中分類	小分類
Ⅰ 違法・有害情報 リスク	a 違法情報	1 著作権等、肖像権、犯行予告、 出会い系サイト等
	b 有害情報	1 公序良俗に反する情報、 成人向け情報等
Ⅱ 不適正利用 リスク	a 不適正接触	1 誹謗中傷
		2 匿名SNS
		3 実名SNS
		4 迷惑メール
		5 アプリケーション(※)
	b 不適正取引	1 詐欺、不適正製品等の販売等
c 不適正利用	1 過大消費	
	2 依存	
Ⅲ プライバシー・ セキュリティ リスク	a プライバシー リスク	1 プライバシー・個人情報の流出、 不適切公開
	b セキュリティ リスク	1 不正アクセス等のなりすまし 2 ウイルス

※ 特にスマートフォンアプリケーションを想定

《習得すべきリテラシー項目》(例)

知識(●)	行動(○)
<p>[原理原則]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 実名登録サイトでも全員が実名登録しているわけではないことを知っている。 ● 実名登録サイトでは、匿名サイトよりプライバシー・個人情報漏洩リスクが高いことを理解している。 	
<p>[発信者側]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自らの情報を公開する範囲に注意する必要性を理解している。 <p>[受信者側]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 実名登録サイトにおいても、事実と異なる情報登録があり得ることを理解している。 	<p>[発信者側]</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 適切な公開範囲を設定する。 <p>[受信者側]</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 実生活に関わりのない人から連絡があった場合は、トラブルが生じる可能性があるとの認識で慎重に対応する。

《問題例》

問 同じ趣味の人が集まる実名のSNSで、同性の人が会いたいとメールをしてきた時にとるべき行動で、最も適切なものはどれか。

- (1) 実名のSNSであっても素性を偽っている場合があるので、自分だけで判断せず、保護者に相談する。
- (2) 実名で登録しているメンバーだから安心して会う。
- (3) 同性の人なので、安心して会う。
- (4) 同じ趣味を持つ仲間なので、いろいろ聞きたいので絶対に会う。

【参考3】テストの実施概要(フェーズII)

1 プレテスト

- ・ 本年2月、全国14の高等学校等の協力を得て、約600名の1年生を対象に、テスト問題(全49問)の妥当性等を検証するためのテスト(プレテスト)を実施。テスト問題の信頼性が概ね確認された。
- ・ 一部の選択肢が有効に機能していないことが判明した問題については修正を加えた。
- ・ 全体平均点は100点満点換算で約73点。
- ・ アンケート等により、インターネットを活用している青少年の方が、活用していない青少年より、リテラシーが高いという結果が出た。

2 本テスト

- ・ 本年6月～7月、全国23校の高等学校等の協力を得て、約2500人の1年生相当を対象に、昨年度のプレテスト問題を改善したテスト問題(全49問)にて、実際にリテラシーを測るためのテスト(本テスト)を実施。
- ・ テスト問題の妥当性・信頼性はさらに改善された。
- ・ 全体平均点は100点満点換算で約67点。
- ・ アンケート等により、スマートフォンの普及や、都市部と地域のリテラシーの相対的な差などが明らかになった。

【H24年度協力校概要】

地域数	所在地区分	校種	人数	平均点
計11地域	特別区等 3校	国立 2校	男 1,423人	男 32.5点
	中核市 8校	県等立 15校	女 988人	女 33.6点
	その他 12校	私立 6校	(不明 53人)	
	計 23校		計 2,464人	全体 32.8点(49点満点) (100点換算にて約67点)

【テストの結果を分析】



- ・インターネットを活用している生徒の方が、活用していない生徒よりもリテラシーが高い。
- ・都市部の生徒と比較して地域の生徒のリテラシーが低い。

等

活用

○地域の普及啓発活動への活用



活用

○OECD等における国際的なリテラシー指標整備の取組にインプット

OECDオンライン上の子ども保護勧告(2012.2) 抜粋)

- ① 全ての関係者への勧告
- ② 政府の国内取組への勧告
 - d) 普及啓発活動による保護者及び子どもへの支援
インターネット・リテラシーの授業の導入、関係者によるリテラシー教育の支援、
子どもと保護者のインターネット・リテラシーの進化を定期的に評価することの奨励 等
 - e) 科学的根拠に基づく政策の支援
子どものインターネット利用、政策の影響評価などについての定期的な調査実施 等
- ③ 政府の国際取組への勧告
 - b) 国際指標の策定等政策の国際比較分析に向けた基盤の整備



